

届け言の葉、君の音

姪谷凌作

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VOICE ROI D二次創作です。百合要素を含みますが、R—18要素は含みませ
ん。

ある日突然、声を失った琴葉茜と、その双子の妹、琴葉葵の話です。少々のシリアル
要素を含んでいます。

他にも結月ゆかり、弦巻マキ、東北ずん子、東北きりたん、月詠アイ、冰山キヨテル
が登場いたします。先生だけはボカロ勢ですがお気になさらずに。

モブ以外にオリキャラは含みません。また、他作品からの登場人物もございません
が、作者は実況動画漬けなので、時々動画作成主様のうちの子設定（や口調）を意識的

に流用もしくは一部気づかないまま設定として使用していることがあると思います。
感想・評価・誤字誤用警察は歓迎です。

1. 5万字程度ですが、楽しんでいただけると幸いです。

参 式 壴

目

次

26 12 1

コーヒーの香りが部屋を包み、時計の短針が七を指そうとする頃、葵は出来上がった朝食を器につぎ分けながら違和感を覚えていた。

さつきドア越しに声をかけたはずの双子の姉、茜がまだ起きてこないのだ。

茜は普段から寝坊することが多いので葵が琴葉家の朝食係を担っているが、起こしたにも関わらず返事もないまま起きてこないとは珍しい。

確かに最近ぼちぼちと人気も出始めて仕事も多いので睡眠時間を削っているが、今日はゆかりさんとの約束があつたはずだ。昨日楽しそうに話していたのでよく覚えている。

「おねえちゃん？ 寝坊しちゃうよー？」

出来立ての朝食をテーブルに運び、茜の部屋の戸を叩く。返事はなかつた。

「開けるよー？」

一応断りを入れて部屋に入る。茜は突然入つてくるので別にそうしなくてもいいのだが、なんとなく部屋に入るのはきちんと許可を取つている。

「あつ、なんだ。起きてるなら言つてよね、お姉ちゃん。おはよう」

茜は桃色のパジャマのままベッドに座っていた。まだ少しほううとしているようだが、朝ならよく見る光景だ。

「

茜はこつちを見て何やら口をぱくぱくと動かしている。

「お姉ちゃん、どうしたの？ 今度はパントマイムじつっこい？」

茜は時々わけのわからない遊びを始めたりする。昨日も『葵くすぐりゲーム』と称してさんざんくすぐられた。それでも実は、葵は茜の突飛な発想に振り回されるのが好きだつたりするのだが。

けど、茜は葵のその言葉にひどく驚いたようだつた。取り乱したように声を荒げるふりをしている。

「どうしたの……？」

茜は飛び出すようにベッドから出て、自分の机から適当な紙とペンを取り出し、さらさらと何かを書きなぐり、こつちに見せてきた。

『アオイ、ウチ、なんや声が出へんくなつてもーたみたいや』

続けて口をぱくぱくとするジエスチャー。声を出そうとしているのだろう、掠れた空気が漏れる音だけが微かに聞こえてきた。今度は葵が動転する番だつた。

「えっ!? 大丈夫? 喉痛い? 風邪? 病院行く? どうする?」

次々と矢継ぎ早に質問が出てくる。葵はつかみ掛からんばかりに茜に問い合わせかけていた。

ゲームの実況やナレーター、声優業をしている二人にとつて、声は第一の仕事道具であつて、もつとも酷使するものだ。スケジュールを詰め過ぎたのが祟ったのだろう。

茜は葵が取り乱すことを予測していたのか、なだめるように待てのハンドサインを出しながら、紙に書き加えた。

『ゆかりさんに事情を説明しようにも出来ひんから、葵、頼んでええか? あと、病院行きたいからついてきて、センセにも説明してほしい。ウチは大丈夫やから、葵も落ち着き。ちょっと仕事しすぎたみたいや』

丸っこい、自分とそつくりの筆跡を見て、葵は少し落ち着いた。こういう時こそ自分がしつかりしないとと思いなおし、強く頷く。

「すぐに病院に行くからお姉ちゃんは着替えて。私はゆかりさんに電話してくるから」

葵がそう言つて踵を返そうとしたが、肩を強く掴まれる。まだ伝えたいことがあるらしい。

『まだ病院はあいてないで。それにゆかりさんもこんな朝早く電話されても迷惑やろう

し、まずはご飯にでもしようや』

時計を見ると、まだ七時をやつと回ったところだつた。朝食もすっかり忘れていた。葵は自分がまだ慌てていたことに気づかされ、改めて問題にも冷静に対処する双子の姉を尊敬するのだった。

タクシーが病院につくまでの二時間、二人は一言も言葉を交わさなかつた。声の出ない茜は勿論、葵も喋らなかつた。話すような話題が無かつたのだ。

葵は今までの生活を想起し、後悔した。自分はいつも茜の話を聞いてばかりで、自分から話しかけるということがほとんどなかつたからだ。消極的で、受けに回りがちなのは前々から治そうとは思つていたが、今日ほど後悔したことはなかつた。

「…………着いたよ。お姉ちゃん」

九時びつたりに病院が見えてくる。車に乗つての移動の時はすぐに寝てしまう茜だが、今日はうつむき気味なだけで起きているようだつた。

案の定一番乗りだつたようで、すぐに診察を受けることができた。

葵は黒縁眼鏡の若い先生に事情を説明した。先生は茜の喉をしばらく診察した後、

困ったような表情をして、言つた。

「これは、もつと大きな病院で診てもらつたほうがいいかもしません」

二人の間に緊張が走る。

「どう・・・なんですか」

茜は聞こうにも聞けないので、代わりに葵が勇気を振り絞つて尋ねた。

「まだ詳しい検査をしていないので何とも言えませんが、ここまで重度の嗄声が急に起つたのならば、何らかの大きな問題があると考えるのが妥当です。もう一度お伺いしますが、今までに声が出なくなつた、もしくは最近喉に違和感を感じていた、ということはありませんか？」

茜は首を横に振つた。心当たりがないようだ。

「そうですか。それなら近くの総合病院で精密検査を行つてください。一応診断書を書いておきますね」

二人は診断書を貰い、病院を出て総合病院へと向かつた。空気は余計に重たくなつていた。

総合病院までは少し遠くて時間がかかるつてしまつたせいか、総合病院はもう混んでい

た。茜は呼ばれるまで整理券をじつと見つめたままだつた。

そして30分くらいして、茜の名前が呼ばれる。葵は先生に同じように説明した。

「ふむ……それでは検査を行いましょう。こちらへどうぞ」

茜だけが連れていかれ、葵は一人また、待合室へ戻つた。

行き交う人を眺めながら、姉の無事を祈る。疲れて眠くなるかと思つていたが、目はつきりと冴えたままだつた。

どれくらい時間が経つんだろうか、茜が戻ってくる。表情を見る限り、まだ何も聞かされていないようだ。

葵も一緒にまた診察室へと戻り、椅子に座つた。

「検査結果の方から申し上げますと――」

緊張が走る。やけに先生の声が響いて聞こえた。

「声帯に腫瘍があるようです。早期に手術をしたほうがいいかと思われます」

写真を見せられる。確かに喉の奥にぽつりと赤い豆のようなものがあつた。

「それは……」

「いえ、手術 자체はそう大変というわけではありませんし、費用も保険が適用されるので、そう掛かるものではありません。術後数日入院して、あとは一週間ほど声を出そうしないようにしていただければ、無事に元通り声は出せるようになります。仕事に関して

も、続けてもらつて大丈夫ですよ」

高鳴つていた動悸が、糸が切れたように緩まつてゆく。茜も同感らしかつた。やれやれとばかりに肩をすくめている。

「良かつたね、お姉ちゃん」

『せやな。一瞬もうダメか思たで』

「じゃ、私はとりあえず事務所の方に連絡してくるね。お姉ちゃんは手術について話を聞いてて」

嬉しそうに頷く茜を残して、葵は診察室を出た。すぐに報告したかったけど、マナー違反なので一応病院の外に出た。

「…………」ということになりました

「はい。わかつたわ。大目に見ても一ヶ月あれば復帰できるつてことね。茜ちゃんにもお大事について言つといて」

「はい。ありがとうございます。それでは」

葵が報告を終えて病院に戻ると、茜が診察室から出てくるのは同時だつた。

『腫れ物、切るらしいんやつて』

「まあ、腫瘍を取る手術なんだから普通なんじやないの？ 麻酔かけるから痛くないんでしょ？」

『せやけど、知らん人に体切られたくないなあつて。葵、センセの代わりにやつてくれへんか？ 葵がやつてくれるならウチはちょっと痛くても我慢するんやけどなあ・・・』
「そ、それはさすがに諦めようよお姉ちゃん・・・」

茜は不服げにしているが、少し楽しそうだ。葵は茜に笑顔が戻ってきたことを何よりも喜ぶのだつた。

家に戻ると、家の前でゆかりさんが待つていた。

「あ、ゆかりさん、こんにちは。来てくれたんですか？」

「もちろんです。茜さんが大変と聞きましたから」

「あたしも來たよー」

「茜さんの一大事ですかね。あ、今日は妹のきりたんもつれてきました」

「初めまして。ずん姉さまの妹、東北きりたんです」

ゆかりさんのほかにも、弦巻マキ、東北ずん子、東北きりたんの三人も来てくれている。一気に人が増えて賑やかになつたせいか、茜は嬉しさのあまり少し涙ぐんでいる。

「と、とりあえず一旦上がつて、話は中でしよう?」

「ええ、それがよさそうですね」

葵は四人を家に上げ、ざつと現状を説明した。みんなも手術すれば大丈夫だという話を聞いてほつとしたようだ。

「ふう、もう一緒にお仕事できないのかと心配しましたよ」

『心配かけてごめんな』

「ゆかちゃんつてば、本当に慌ててたもんねー。少し妬いちゃつたかなー」

「マツ、マキさん! 今そんなこといわなくていいじゃないですか!?

マキがゆかりにじやれつく。こうしたいつもの光景が、非日常を体験した後では何よりもありがたい、と葵は心の底から実感した。

「そうだ、古来から東北に伝わる伝統和菓子であるずんだ餅は万病に効くので、茜ちゃん、お一ついかがですか? あ、みなさんもどうぞ」

いつのまにか懐から弁当箱のようなものを取り出しテーブルの上に置いていた。あんなに大きな箱が懐に入っているなんて着物つてすごいなあ。

ふたを開けると、中にはぎつしりとずんだ餅が入っていた。試しに葵も一つ貰う。う

ん、普通においしい。

「うん、なかなかいけますね」

「それはもうずん姉さまの作つたずんだ餅ですから。私ももう一つ」「きりはご飯食べられなくなるからまた後でね？」

「ずんだ餅もご飯みたいなものじやないですかー。ぶーぶー」

「きりたんちゃんは成長期だからねー。バランスよく食べないと大きくなれないよー」

「はあーい」

みんなの暖かな雰囲気に茜も和んだらしく、さつきよりも表情が穏やかだ。ただ、あまり話せないのが少しストレスなようだが。

それからも6人は、夜になるまで遊んだ。

四日後。

「行つてらつしやい、お姉ちゃん。また明日ね」

手術前の、最後の挨拶だ。茜はこくりと頷いて見せた。

先生に何度も繰り返し説明された通り、手術自体は数時間で終わるし、失敗することもまず無いとのことだ。その点は安心していた。

ただ、葵はこれから遠方の仕事が入つてるので、手術室の前で待つことはできない。会うのは三日後になるのだ。

そのことを茜に告げた時は、『どうせ麻酔と痛み止めでしばらく意識なんてマトモやないんやからええんやで。お姉ちゃんの分まで頑張つてや』と言つていたが、後で少し悲しそうにしていたのを葵は知つている。

葵はそれをずっと気にしながら、新幹線に乗るべく駅に向かつた。

『まだ結構痛いけど、無事終了しました』

葵は仕事前にそんなメールを貰つた。茜が珍しく標準語を使う時は大体反省している時だ。迷惑をかけたと思っているのだろう、葵は『おめでとう。よかつたねお姉ちゃん。お大事に』とメールを送ろうとして、『早く会いたいな』と付け加えた。

『けが人を照れさせたら痛くてあかんよ』

とすぐに返つてきて、葵は仕事を頑張れる気になつた。姉に会える時が待ち遠しい。

葵は隣に姉がいない久しぶりの場で、いつも以上に奮闘するのだつた。

式

そうしてさらに数日。葵は帰りの新幹線に乗っていた。

茜の具合はいいいらしく、切った傷が治るまで離乳食みたいなのが食べるのが楽しくないとか、声を出さないと口調を忘れそうだと、そういつたことを度々メールしてきている。

そして今日、病院周辺くらいなら外出してもいいと許可が下りたらしい。もちろんまだ安静が必要なので声は出せないし、固形の食べ物や刺激物系の飲み物も禁止なのが。それでも茜は嬉しそうだつたし、葵も嬉しかった。

「待つてね、お姉ちゃん」

葵は誰に言うでもなくそう呟き、動き始める座席に身を預けた。

『お姉ちゃん、後五分くらいでそつちにいけるよ』

『おつ、それなら病院の前で待ってるで。久しぶりのシャバやつて言うとなんか刑務所みたいやな』

葵はビルの隙間に病院が見えてきたところでメールした。数十秒と待たずに返信が来たので、茜もメールが来るのを待ち受けていたのだろう。葵は心が躍った。

家に一度も帰らずに来たので、スーツケースを持ってきたままだ。葵は見ている病院が大きくなるにつれ、それを放つて駆け出したくなつた。

そして、最後の角を曲がつたところで、葵はそれに気づいた。

病院の前で、そわそわとあたりを見回す自分そつくりの女の子。紛れもなく姉だつた。

「お姉ちゃん!!」

堪らず手を振つて駆け出す。茜も気づいたようだつた。

「葵!!」

茜の声が、耳に届く。

——あれ、お姉ちゃん。なんで大声出しているんだろう。声を出しちゃいけないはずなのに。

そんな疑問が頭をもたげ、自然と足が止まる。

その刹那、鼻先をトラックが通り過ぎる。遮られた視界が再び元に戻り、次の瞬間には膝から崩れ落ちた姉の姿が映つた。

「氣いつける!!」 そう怒鳴る運転手の声を無視して、姉のもとに駆け寄る。

茜は口元を抑えて、激しくせき込んでいた。その指の隙間からは、血が滴っていた。
思考は止まらなかつた。足を止めずに病院に駆け込み、助けを求める。担架で茜が運ばれ、緊急手術が始まるまで、葵はほとんど無意識だつた。

プツリ、と手術中のランプが消えてしばらくして、麻酔で眠つた茜がベッドに乗せられて運ばれてきた。

医者に呼ばれて、葵は診察室に入つた。

「どうでしたか」葵は待ちきれずに尋ねた。パソコンに写真が映し出された。

「術後の傷が開いてしまつたようです。縫うことでこれ以上傷が広がることは抑えましたが、傷が深いのでどうなるのかは明言できません」

喉の紅い傷が、葵にはやけに空虚な、それでいて痛々しいものに見えた。

「ただし」

「これだけ声帯に深い傷を負つてしまつたので、もし声が出せるように回復したとして
も、元の声とはズレが生じてしまう事が考えられますし、喉への負荷的にも声優業を続
けることは不可能と思われます」

——え？

時が止まる。動悸だけが際限なく高まる。線がぼやけてぐにやりとひしやげ、医者の顔が歪む。

葵は無言のまま意識を失つた。

混濁した意識。その中で葵が見ていたのは、唯一無二の存在である双子の姉、茜だつた。

幼少期、”あの頃”。そして時間は大きく飛んで、二人が一緒に仕事を始めた頃。それをゆっくり、ぼんやりと眺めていた。

茜の声が突然でなくなつたあの日まで、姉との鮮明な記憶をたどつていく。

そして、今日がやつてくる代わりに、記憶のスライドショーは最初に戻つていく。もう何度目だろうか。同じものを繰り返し見ていた。それでも飽きたなんて思わないのは、ひとえに姉のおかげだろうか。

否、先を見るのが怖いだけだ。私たちの”結末”を迎るのを拒否し続けるが為に、何

度でも巻き戻される。

葵はこれが一種の走馬灯なのかと、ある意味では悟っていた。

ここから先に待つ結末、それは私の密かな夢、いや、私たちの密かな夢を破壊し尽くすには、十分すぎるのだろう。

そして多分、やつと見つけたその夢に幕を引いたのは私、葵自身なのだ。

事実はくつきりと頭の隅に焼き付いている。しかし、聞くことと理解すること、そして受け入れる事は違う。

まだその結末を見たくない、先延ばしにしたい。その一心でこの走馬灯にしがみついている。

ああ、嫌だな。

漠然とした嫌悪から抜け出せないまま、葵の意識は体へと引き戻された。

薬品の臭いが染みついた、あまりふかふかとは言えないベッド。葵はそこで目を覚ました。

どうやら寝かされていたらしい。隣には茜が寝ている。記憶の混濁は無かつた。窓の外を見ると、もう夕日がビルに隠れようとしていた。

葵はひとまずベッドから出て、近くにいた看護師に話しかけた。あの医者は今は別の患者を診ているそうなので、しばらく待つてから話を聞いた。

葵は内心、自分が思った以上に冷静であることに驚いていた。頭も体も、あんなことを受け入れたつもりなんてないのに、はつきりと冴えている。

「今日の夜ごろには麻酔が切れると思いますので、待つていかれますか」「はい。そうします。これからのお話もありますし」

すらすらと即答して、葵は病室へ戻った。

医者は夜ごろと言つていたが、茜はもう目を覚ましていた。まだ幾分かぼんやりとしているが、起き上がってこちらをみている。

「お姉ちゃん・・・・・」

姉と目が合うと同時に、今まで冷静に押し殺していたはずの涙が、堰を切つたようにあふれ出す。

そのまま胸に顔を埋めて泣きたかつたが、強い衝撃はよくないのかもしれない、と遠慮がちに寄り添うだけしかできなかつた。

姉の暖かい左手を握り、泣きじやくる。茜は何を理解したのか、右手でずつと葵の頭をなで続けていた。

そうしてしばらくして、茜からノートが渡された。葵との会話用の、茜色のノートだ。

『ウチの怪我、どないやつてん?』

予想されていたその質問に、葵はひどく恐怖した。それを告げてしまうことで茜がどのような反応をし、どのように傷つけてしまうのか、まるで見当もつかないからだつた。
それでも、葵をじっと見つめる茜に、嘘をつくことはできなかつた。嘘をついたところですぐに見抜かれてしまうことも分かつていた。

「もう、お仕事はできないつて」

そう言うと同時に、また涙があふれてくる。茜は取り乱さなかつた。

『そか。ま、なんとなくわかつとつたわ。まー、葵が無事やつただけでウチは満足や』
『ウチもちやつちやと怪我直して退院できるよう頑張るから、葵もそう落ち込まんと』
『退院して最初の食事は葵に作つて欲しいけんな。エビフライがええな』

いつも増して饒舌、いや、饒筆に喋る茜が落胆と困惑を隠そうとしているのは、葵でなくともわかるだろう。茜はそれくらい嘘や隠し事が苦手なのだ。

「うん、そうだね。お姉ちゃんの分も、私が頑張つてみるよ——お大事に。お姉ちゃんも頑張つてね。ありがとう」

それでも、騙されるのも妹の仕事だと必死に言い聞かせて、葵は部屋を後にして、暗く青白い廊下は、二人の未来を示しているかのようだつた。

憂い。

寝ても覚めても、状況も気分も変わらない。普段通りに六時に目覚ましは鳴ったはずだが、十時を回った今でも一度も起き上がる気にはならなかつた。

深呼吸しても気は晴れない。空気がよどんでいるせいだろうか。窓を開ける気にもならないけど。

今日一日をこんなテンションのまま過ごしてしまうことになるだろう。そう思つた瞬間に、

ピンポーン、とドアホンが鳴つた。

まるでそれが正解だと言われたようなタイミングだ。葵は若干やつかみ氣味にドアを開けた。

待つっていたのは宅配便でも新聞勧誘でもなく、背の低い、小さな女の子だつた。葵も背が低いほうだが、それよりも頭一つくらい低くて、そのくせハリウッドスターみたいな大きなサングラスをかけている。

「ど、どちらさまですか？」

サングラスを外すと、そこにはくりつとした目。葵が気づくと同時に、柔らかな声で名乗る。

「こんなにちわ、つくよみアイだよ」

アイは葵の先輩にあたるわけだが……身長や声、格好も相まって年齢不詳だ。ベテランであるはずのゆかりさんも年齢は知らないのだから恐ろしい。

「こーはいのふちようときいて、おうえんしにきたよ」

「あ、そうだつたんですか。お姉ちゃんは今——」

「そうじやないよ」

格好つけて、ちつちつと指を振る。けど、続く言葉は全く関係のないものだった。

「のどがかわいちやつた。なにかちようだい」

「いいんですけど……あつちよつと待ってください！」

昨日帰り着いてからそのまま寝てしまつたことを思い出し、部屋に上がり込もうとするアイを引き留め、慌てて部屋の片づけをしに戻るのだった。

「ふはー。やつぱりオレンジジュースはおいしいのだ」

アイはオレンジジュースを飲み干してご満悦だ。かと思うと唐突に話を切り出した。

「さつきあかねちゃんのところにいつてきたのだ。はなしはすべてきかせてもらつただ

「……………そうですか」

葵が目に見えて困っているのを見て、アイは「じゃあくん」とポケットから一枚の手紙を取り出して、葵に手渡した。

「あかねちゃんが、あおいはどうせおちこんでるやろから、これをわたしといてつてつてたのだ」

「あ、ありがとうございます。後でゆっくり読みますね」

「いますぐよむのだ」

また泣いてしまいそうな気がしたので一人で読むつもりだつたのに、アイにはつきりとそう決められる。何か理由があるようだつた。

手紙を開いて、最初の文に目をやる。

「ちゃんとおんどくするのだ。しじととおなじようにほんきでやるのだ」「だけど……」

「せんぱいのまえでじつりよくをみせてほしいのだ」

「はい・・・・では、いきます」

葵は呼吸を整え、仕事をするときのように意識をとがらせた。

「葵へ。ウチはどうにも葵の前やとカツコつけてまうから、こうやつて手紙を書いた。読み辛いかもしけれへんけど、どうか堪忍してくれや」

葵は冒頭だけで涙が出そうになつたけど、必死にそれを押さえつけて続きを読んだ。

「ウチはな、声が出一へんくなつたことが、正直、ものすごく辛い。けどな、ウチはそれより、ウチの声が出一へんくなつたせいで葵が目標を失くしてしまうことの方が怖い。ウチと葵は双子で一心同体、夢も目標も一緒に頑張ってきたわけやけど、ウチがそれに到達できひんからつて、葵がそれを諦める理由にはならん。むしろウチの分まで葵が頑張つてくれな困る。ウチは葵が大好きや。ずっと前から誰よりも、何よりも好きや。愛しとる。だから、お姉ちゃんに頑張つてる姿を見せてほしい。頑張つてな。茜」

「追伸。泣きたいなら泣いてもええけど、ウチの前で泣いてや。お姉ちゃんが慰めたるで」

・・・不思議と、涙は出なかつた。代わりに、心が暖かいもので満たされた。

「じょうずにできましたなのだ。あおいちゃんはやつぱりどこにだしてもはずかしくないこーはいだよ」

アイがその小さな手でぱちぱちと拍手をする。いつの間にかテーブルの上のオレンジジュースのペットボトルは空になつていていた。半分くらい残つていたはずなのに。

「アイはそろそろおいとまなのだ。またこーはいがおちこんでたらはげましにくるのだ」

「え？」

「アイがはげましたかつたのはあおいちやんのほうだよ。アイはあおいちやんのきもちなんておみとおしだから、きっとおちこんでいるとおもつたのだ」

来た時と同じように、ちつちつと指を振る。どうやらそれがお気に入りの仕草のようだ。

今度はぶどうジュースが欲しいのだ、と言つてサングラスをかけなおし、とことこと出て行つてしまつた。葵は今度仕事で一緒になつたらぶどうジュースを差し入れにしよう、と思つた。

「うう・・・・」

アイが居なくなつて、今更のように顔が熱くなる。葵の気持ちなんてお見通しつてことは、葵が今までの茜の登場シーンをすべて保存していること、朝時々すぐには起こさずに茜の寝顔を堪能していること、茜が出張の時はこつそりパジャマを押借していることを知つていたりするのだろうか・・・・

と、手紙の内容そつちのけで一人悶える葵に、また、ピンポンとドアホンが鳴つた。

今度は誰だろうかと、極力平常心を装いながらドアを開ける。

そこには、黒のスーツをまとつた長身瘦躯の男性が立つていた。銀縁の眼鏡をのついた童顔は、柔らかな表情でこつちを見ている。

「あ、こんにちは、キヨテルさん」

近くの学校で先生をしている、氷山キヨテルさんだつた。同じ事務所の歌愛ユキという子の担任をしていて、一緒にいるのを時々見かける。休日にはバンドをやつてゐるらしく、このあたりでは結構評判になつてゐる。

「や、葵君。久しぶり。たまたまアイ君と会つて少し寄つたんだ。事情は聞いたよ」
 「そうですか。さつきまで落ち込んでいた私を慰めるつて言つて來てくれていたんですね」

「そうかい、大変だね。何か手伝えることがあつたら言つてくれ。つてのと、これは差し入れだ。病室で使つていいものかはわからないが・・・」

葵は、エビフライのお香というなんだかよく解らないけど葵は喜びそうな差し入れを受け取つた。裏面を見る限り喉にはいいらしいのだが・・・どこで見つけてきたのかは気にしないことにした。

「それじゃあ私はそろそろライブの練習があるんでね。茜君にお大事にと言つておいてくれ」

「あつ、ありがとうございました」

「ところでアイ先輩とはどんな関係があつたんだろう・・・? と疑問に思いながらキヨテルさんを見送つた。まあ、思つたより世界というのは狭いものだ。

「・・・さて、そろそろ荷物をまとめなきや」

朝より幾分か上がつたモチベーションで、葵は身支度を始めた。

参

『さつきあんなやつを書いて、すぐに来られると恥ずかしいな』

着替えや差し入れを持つてきた葵に、すぐにそんなことを書いたノートが渡された。手紙のことを言っているのだろう、葵も顔が熱くなるのを感じた。

「私も・・・好きだから・・・・うれしい」そう言うのが、口下手な葵の精一杯だった。
それに対し茜は余裕綽々・・・なふりをしながら、必死によそ見に努めていた。やはり茜は嘘隠し事が苦手である。

二人とも、ずっと昔から気付いてはいたのだ。

ただ、それを言いだすきつかけというか、タイミングが無かつただけである。と、言い訳して今までやつてきたのだ。

実は二人とも何度か言おうとしていたのだが・・・・色々と運が無かつた。

『素直になるつて、大事やな』

「そうだね、お姉ちゃん」

葵が茜の手に触れようとする――――――――――――――――――――――――

「はーい、お薬の時間でーす」

「ひやああ!?」

入ってきたのは、金髪巨乳の赤い服を着たお姉さん・・・・明らかに看護師ではなかつた。

「な、何してるんですかマキさん」

「いやー、ゆかりんが心配してたからねー。来てみたらねー。なんだかねー」

チラチラとこっちを見てくる。見ていたぞということだろう。

「ど、どこから見てましたか?」

「えーとね、葵ちゃんが荷物もつて病院に入つて行くとこから」

「最初の最初じやないですか!?

「ま、あたしも他人のことは言えないけどさ」

「えつ!? どういうことですか!?

「ずっと前からゆかりんと実況してたし、最近は話さなくともお互のこと分かるよう

になつてきだし、そろそろいい頃なんじやないかなー・・・つて

独り言のように話すマキの表情は、普段の快活なものとは少し違つて、恋する乙女の

ようだつた。

「そ、そだつたんですか・・・確かに仲がいいなとは思つてましたけど」

葵がそう言うと、マキは「照れるなあ」と手を振る。今日の葵は来客に振り回されっぱなしである。

「そんなこと言つてたらきりちやんとかずんちやんのこと好きじやん」

「そう言えばこの前会つた時そんな感じでしたね。でも、まだ小学生だし、そういう気持ちじやないんじやない?」

「うーん、あの子を見るとそれは思えなくなつてくるんだよねー。ま、変人揃いの東北一家だし、何とも言えないんだけど」

あはは、とマキさんが笑う。普段通りの快活な笑いだつた。

「茜ちゃんも気を落とさないで、退院したらまた一緒にゲームとかしようねー。それじや、私はそろそろ帰るから、後はごゆつくり」

愛用しているギターであるむすたんを担いで、そのまま部屋を出ていつてしまつた。マキは台風のような子である。

「・・・なんだか疲れちゃつたね、お姉ちゃん」

茜はまだうつ伏せで枕に顔を埋めている。茜は意外と大胆に見えてシャイなどころがあるので、まだ気にしているのだろうか?

「どうしたの?」

返事は無い。そのままもぞもぞと布団にもぐつて行く。「眠い?」と聞くと頷いたよ

うだつた。

「それなら私はもう帰るね。今日はありがと、お姉ちゃん」

葵は引き止められるかと思っていたが、意外にも何の反応もなかつた。

——それから数週間が経つた。

無事茜も退院し、その日にはゆかりさんたちも呼んで退院祝いをした。相変わらず声は出ないけれど、十分楽しそうだつた。

葵の仕事も順調のようで、茜が居なくなつた分を埋め合わせるように人気を獲得し、ファンも増えた。

葵は実はそれをちょっぴり寂しく思つていて、でもそれ以上に茜が喜んでくれるので、楽しい日々を過ごしていた。
そんなどある日・・・・・・

「お姉ちゃん」

葵が声をかけると、茜は驚いたように振り返った。

当然だろう。茜は葵がここに来るなんて思つてもいなかつたはずなのだから。

「今日は収録が早く終わつちやつた。一緒に帰ろう？ 買い物してから帰る？」

『どうしてウチがここに居ることを知つとつたん？』

困惑した茜が、訝しむ様な目で葵を見る。

「お姉ちゃんの妹だからね。時々ここにきて外を眺めては、私の仕事が終わる前に帰つてゐるの、知つてるよ」

ここは事務所の屋上だ。地下にはスタジオがあるので葵は基本はここに通勤しているのだが、茜は正式に引退をしてから、ここに来る必要はもうないはずだ。

多分、茜なりの未練や、羨望の解消法なのだろう。葵は屋上の冷たい風が心に吹き込むのを感じた。

『ごめんな。隠すつもりやなかつたんや』

「うん。でもばれないように気を使つていた事、私は知つてゐる。私も怒つてたわけじや

ないから、別にいいよ』

怒っていたわけじゃないのは、本當だ。だけど、葵は胸がちくりと痛んだ。

風に吹かれる茜の後ろ姿が、とても悲しそうだつたからだ。辛いとか、怖いといった感情が見て取れた。

『今日はウチが腕によりをかけて作つたるで。葵、なんがいい?』

無理して明るく振る舞つてるのはわかつたけど、こんな時にそれについて言及する勇気はない。

「お姉ちゃんの好きなものでいいよ」

『そか。じゃあ今日は天ぷらにしようか』

「お姉ちゃん、本当に揚げ物好きだよねー。太るよ?』

『太るのは葵やないか? 最近ウチが夜ご飯作るようになつてからよく食べるようになつたやん』

「お姉ちゃんがいつも作りすぎるだけですー。それに私は運動するから全然太つてない・・・はず・・・」

『ははは、今日お風呂の時に調べたろうかー?』

『そういう恥ずかしいことを外で言わないの!』

『誰もおらんしええやろ』

「そういうことじゃないもん・・・」

赤面する葵の手を楽しそうに引いて歩く茜。その足取りは軽かつた。
言おうと思つていたことを呑み込んで、葵は手を引く茜に身を任せた。

暇だ。

声が出なくなつてからといふものの、寂しいと感じる時間が増えた。
仕事を辞めたせいもあるが、それ以上に、ふとした時に寂しいと感じることが多い。
音ではなく文字を使うようになつたことで深く考え方をする機会が増えたからかもし
れない。

葵がいたらまだいいのだが、今日も葵は仕事だ。やることも、やりたいこともない。
暗い部屋でつけっぱなしになつっていたパソコンを消して、代わりにテレビを付ける。
芸能人のスキヤンダルが扱われていた。

ソファーに寝転がつてザツピングしながら、ぼんやりと考える。
なにか、できることは無いだろうか。
役に立てるることは無いだろうか。

あの時、声を出して葵を止めたことに後悔はない。もし黙っていたら、もつと悲惨な結末が待っていた。そうなれば自分は躊躇いもなく自殺していただろう。そんな自信があつた。

けど、夢を諦めた身にだつて、できること、やるべきことはあるはずだ。
いつの間にか茜はザッピングを止めていた。

ためにも、自分が頑張らねば。

元々自分は葵より活動的なつもりだ。葵が消極的すぎるのかかもしれないけど。葵の

事も済ませて、身支度ももう済みそうだ。

結局今日も何も思いつかずに、屋上で一日をぼんやりと過ごしてしまうのだろう。そ
うわかっていても、焦燥と不安に追い立てられていた。

唯一の自己表現手段である茜色のノートをバッグに投げ込んで、茜は家を飛び出し
た。

葵は困惑した。

家に帰つても、茜が居なかつたのだ。

出かける時も、葵が返ってくる前には帰つてきていたし、遅れるなら連絡するだろう。家中を一通り探した後、電話をかける。家で鳴りだした。携帯は持つていっていなかつたらしい。

となると、近くのコンビニに出かけただけかな・・・？

そんな希望的観測に安堵する気にはならなかつた。たまによそ見をしているときの、

茜の辛そうな表情が、不安を燻らせた。

どうしようと焦る間にも、時間は過ぎていく。とりあえず友人をあたつてみよう。

はゆかりさんに電話をかけた。

「もしもし、ゆかりです。葵さんですか？」

「はい。実は——ということで」

「それは心配ですね。茜さんの財布はありますか?」

「えつ――と、ありました！」

「それなら遠出の線は薄いですね。近くに出かけただけとか、だれかが家まで迎えに来て出かけたとかが考えられますね。私は茜さんの知り合いをあたつてみます。葵さんは近所をさがしてみてはどうですか？」

「はい。そうしてみます。ありがとうございます」

「いえ、困った時はお互い様、ですよ。それでは」

葵は荷物を投げ出すようにして、そのまますぐに家を出た。

居ない。居ない。居ない・・・

自転車は置きっぱなしだった。財布も携帯も家にあつた。あまり遠くに入つていなければ、コンビニ、スーパー、用がありそうなところは大体行つたが、茜は居なかつた。

葵はまだ探していないところがないかを考えながら暗い道を自転車で突つ切る。

候補が一つ減る度に追い詰められていく、悪い予感が胸を埋める。葵はもう泣きだしそうだつた。

そうして最後に、家の近くの池のある少し大きな公園へとたどり着く。ここは時々、茜が散歩しに来ることがあつた筈だ。

薄気味悪い夜の空間を、走つて回る。童心に帰るなんてものとは程遠い走りだつた。姉の姿は無かつた。

双子は互いの位置と安全がなんとなくわかる、なんて話があるが、そんな奇跡はそう

「そう起きない。

「どうして……」

息を切らしながら、悔しさの余り涙が零れた。

空はどうぶりと藍色に暮れていて、満月が映えている。この景色を、姉と見たかつた。葵は、入れ違いになつたという最後の希望に縋つて、ふらふらと家に戻つた。

その希望は、意外にも的中していた。

消してから出たはずの電気が、灯つているのだ。

呆気にとられる……と同時に、安心からくる脱力と、心配したことからくる怒りが同時にわいてきた。

鍵を回す間ももどかしく感じながら、家にはいる。

茜は料理をしていて、なんの悪びれる様子もなくおかえり、と手をあげて見せ、そこでやつと葵が泣いていることに気付いたようだ。
さつとノートを手に取り、『何かあつたんか?』と書いて渡す。自分を探していたといふことには気づいていないのだろう。

葵は大きく息を吸い込み、近所迷惑なんて放り捨てて、叫んだ。

「お姉ちゃんの、バカあーーーッ!!!」

今まで出したこともない位の大声に、自分でもびっくりする。茜も目を丸くしていった。

「私、いつたん帰つてきたんだよ？ 居なかつたから探してきたんだよ？ 連絡なかつたから、心配したんだよ!?」

またぼろぼろと涙が零れてくる。茜は火を止め、手帳に何かを書き記した。葵は「ごし」と涙を拭つてそれを読んだ。

『心配かけとつたんか。ごめん。ちょっと出かけとつたんや』

『それだつたら遅くなるつてちゃんと連絡しといてよね!!』

『うーん、実は……あー、まだ言うつもりやなかつたんやけど――――よく見とつてな』

茜は火を止め、自分を落ち着かせるように深呼吸して、

「あ」

「お」

「い」

と苦しそうに、一文字ずつ発声した。

それは掠れていたけど、紛れもなく姉の、自分そつくりの声だつた。

『何とか発声法つてやつでな、実は、これを練習しとつたんや。まだヘタクソやし、母音しか出せへんからあおいってしか言えへんけどな』

と、照れて見せる。葵にはそれが、久々の心からの笑顔に見えた。

けど、代わりに、やはり姉は声を失つたことを気にしていた、声を出すことに執着ていたという想像が、葵を責めた。

自分の不注意で姉の夢を奪い、自分はのうのうと生きているという事実が、重くのしかかつた。

「ゞ」・・・・・「ごめんなさい」

『?』

「お姉ちゃんも頑張つてゐるのに、怒鳴りつけちやつて、ごめんなさい」

『ええつて。ウチも連絡忘れとつたしな』

「自分しか見てない馬鹿な妹で、ごめんなさい」

『そんなことないで。葵は頑張つてくれどる』

茜がフオローラしているが、葵は俯いたまま涙で歪んで見えていない様子で、謝罪の言葉を紡ぎ続ける。

「お姉ちゃんの『声』を奪つてしまつて、ごめんなさい」

「・・・・・・・」

茜は答えなかつた。代わりに――
パン、と平手で葵の頬を打つた。

そのまま怒鳴りつけてやりたいと思つたが、喉はそれを許さない。茜は文字を書きつけるまでの時間をひどくもどかしく思いながら、思いをノートにぶつける。

『ウチだつてずつとずつと辛かつたし、死のうかとも思つたんよ!』

そう思いを連ねて、手帳ごと葵に投げつけようとして初めて、その字面の阿呆さ加減に気づいた。

違う。ウチが葵に伝えたかつたんは、こんな格好悪いことやない。そう思い直し、ページを引きちぎつて、次の言葉を紡ごうとする。

『葵が辛いのよりも、ウチの方が辛い』違う。

いくら文字におこしても、葵に本当に伝えたいこととは違うものになつてしまふ。最適な言葉が見つからない。何を言いたいのかも形にならない。こんな時自分は何と言うのだろうか。どうすれば葵に伝わるのだろうか。わからない。

伝えたい。その気持ちはあるのに、その手段がないのだ。

声が出ない。それは致命的だ。ノートにかかれた文字と、喉から、本人の心から出る言葉は、やはり違うのだ。

声を失つた自分には、ノートでしか伝えられない自分には、心を伝える手段なんて無い。

いや、声なら、出るじゃないか。
言葉

そうだ。一番伝えたいことは、それじやないか。

茜は想いのままに、感情のままに、体を動かす。

俯く葵の顎を持ち上げ、自らの唇を重ねたのだ。

「——ツ!」

驚きの余り、葵はぺたりと座り込んでしまう。

茜もすぐにしゃがみこみ、葵を押し倒すようにして、抱きしめる。

そして、耳元で、

「あ、お、い」

前よりも幾分か通つた、それでもまだ細い声で、もう一度そうささやいた。

それからどのくらい経つただろう。料理は作りかけのまま、もう冷めているだろう。

茜はなにやらノートにさらさらと書いた後に、それを葵に渡した。

『ウチが声を出すんは、葵つて呼びたいからなんよ？ 葵が気に病むことは無い。葵が

無事やつたんが、お姉ちゃんは一番うれしいんや。だから、ウチの声が出なくとも、葵は気にせんでええ。気にされる方がよっぽど辛いんや・・・』

読み終わるや否や、葵は頬を手のひらで挟まれる。こつちを見ている茜は、泣き笑いだつたけど、幸せそうに見えた。

もう一度、二人は口付けを交わす。お互いに涙の混じつた、塩辛いものだつた。

けど、茜にはそれが幸せで、

葵にも、それは紛れもない幸せであつた。